

基礎研 レター

現在の暦年はなぜ冬の1月という 時期からスタートするのか？

常務取締役 保険研究部 研究理事

ヘルスケアリサーチセンター長 中村 亮一

TEL: (03)3512-1777 E-mail: nryoichi@nli-research.co.jp

1—はじめに

これまで、日本や諸外国における事業年度や会計年度や学校年度は、1月や4月や9月等から、スタートすると述べてきた。それでは、そもそも現在の暦年の1年はなぜ真冬の時期の1月からスタートするのだろうか。

今は、我々は現在の暦年の概念に慣れてしまっているのですが、いまさら暦年の概念を変更することは考えられないが、別に現在の4月や9月から1年がスタートしていたとしてもよかったはずではないかと思わないだろうか。今回はこうした点について調べてみた。

2—ローマ時代の暦の変遷(その1)と

1年が現在の1月からスタートすることになった理由

なぜ、現在の真冬の時期の1月から1年がスタートするようになったかを知るには、暦（暦法）の歴史を紐解いてみる必要がある。ここでは、ローマ時代の暦の変遷について、簡単に説明する。以下の説明は、「暦と占いの科学」（永田久 新潮選書）等を参考に記述している。

1 | 古代ローマの初めての暦—ロムルス暦—

古代ローマにおいて、初めて暦が作られたのは紀元前8世紀で、ローマ建国の祖と呼ばれるロムルス（Romulus）の手によるものとされている。この「ロムルス暦」は10ヶ月しかなく1年が304日であった。

これは、先の永田氏の著書によれば、「当時のローマ人たちの生活というのは、今日のように食料も防寒具も潤沢ではなかったもので、農耕面でも軍事面でも、活動を始めるのは、そろそろ暖くなる季節、すなわち現在の三月ごろからであったらしい。それ以前の寒さも厳しく、塩漬肉や穀物で辛うじて生きる期間は、まさに「冬籠り期」で、名づける価値もない名無し月の日々だった」ようであり、「農作業も戦さもできない、生活のすべてが凍結してしまう時期の約60日間が過ぎてはじめて、日付としての意味もあると考えられた」ことによると説明されている。

2 | ヌマ暦

ところが、このロムルス暦では、冬に全く目盛りのない時期があることになり、いかにも不便だということもあって、ロムルスの後を継いだローマ皇帝ヌマが、ロムルス暦の後に、2ヶ月を加えて、1年12ヶ月とした。さらに、月が地球の周りを1回転する日数を基準にしつつ、奇数を尊ぶ考え方から、1年を355日と設定した。これを、ロムルス暦での30日の月を全て29日とするという振り分けに従いつつ、新たな11月と12月に残りの日をそれぞれ29日、28日と振り分ける「ヌマ暦」が作成された。12月(現在の2月)が28日となったのは、355日を振り分けていったときに、最後に28日しか残らなかったことによる。

3 | ヌマ暦の改革

このヌマ暦がしばらく使用されていたが、紀元前153年に、「ヌマ暦の改革」が行われて、ヌマ暦の11月を1月とする順序変更が行われた。この理由について、永田氏は、11月のJanuariusという名前は、ローマの門神Janus(ヤヌス)を称えて命名されたものであったが、Janusは行動のはじめをつかさどる神であったため、このJanusの月が年初としてもっとも相応しいとされたのであろう、と述べている。

この、「ヌマ暦の改革」による12ヶ月の順序が現在に引き継がれた形になっている。

ローマ時代の暦の変遷(その1)

	ロムルス暦		ヌマ暦		ヌマ暦の改革	
1月	Martius	31日	Martius	31日	Januarius	29日
2月	Aprilis	30日	Aprilis	29日	Februarius	28日
3月	Maius	31日	Maius	31日	Martius	31日
4月	Junius	30日	Junius	29日	Aprilis	29日
5月	Quintilis	31日	Quintilis	31日	Maius	31日
6月	Sextilis	30日	Sextilis	29日	Junius	29日
7月	September	30日	September	29日	Quintilis	31日
8月	October	31日	October	31日	Sextilis	29日
9月	November	30日	November	29日	September	29日
10月	December	30日	December	29日	October	31日
11月	—		Januarius	29日	November	29日
12月	—		Februarius	28日	December	29日
1年		304日		355日		355日

以上、まとめると、「そもそもの暦の概念のスタート時点では、農作業等をはじめることができる、春の時期が1年の始まりと考えられていたことになる。ところが、新たに加わった月の名前に使用された神の位置付けから、この月が1年の始まりに相応しいということで、現在の1月が年初になった」ということになる。

これを聞いて、多くの人が何ともいわく言い難い気持ちを感じるのではないかと思われる。また、こうした経緯によれば、農耕文化が発達した強大な帝国が南半球にあったら、現在とは異なる時期が1月1日になっていたかもしれないということになる。

3—現在の月の名前の由来(その1)

ロムルス暦において、使用されていた月の名前の多くは、現在使用されている月の名前に引き継がれているので、ここでは、これらの月の名前の由来について述べておく。

1 | ロムルス暦での月の名前の由来

ロムルス暦での1月から4月までは、ローマ神話の神々の名前に因んでいる。具体的には、1月は軍神 Mars (マルス)、2月は春と美の女神 Aphrodite (アフロディーテ)、3月は豊穡の神 Maia (マリア)、4月は結婚の神 Juno (ユノー) からきている。

一方で、5月以降は、ラテン語の数詞から、「第〇番目の月」という意味で、5月は Quintilis、6月は Sextilis、7月は September、8月は October、9月は November、10月は December と名づけられた。

2 | ヌマ暦で追加された新たな月の名前の由来

ヌマ暦で追加された新たな月のうち、11月については、先に述べたように、ローマの門神 Janus を称えて命名されたものであった。また、12月については、死者をつかさどる神であり、贖罪の神である Februus (フェブルウス) からきている。

4—ローマ時代の暦の変遷(その2)と現在の月の名前の由来(その2)

ここでは、ヌマ暦の改革以降の暦の変遷について述べる。

1 | ユリウス暦

ローマ帝国を築いた Julius Caesar (ユリウス・カエサル又はジュリアス・シーザー) も暦に関心があり、紀元前46年に1年365日の暦である「ユリウス暦」をつくった。

ヌマ暦の改革によって、Januarius が年初となっていたが、一般的には十分には定着しておらず、正式に Januarius が年初となったのは、ユリウス暦であった。さらに、カエサルは1年を365.25日と定め、平年を1年365日としつつ、4年に1回、1年366日の閏年を設けた。また、奇数月を31日とし、偶数月を30日とした。ただし、元々日数の少なかった2月は日数が少ない月として据え置かれ、29日と定められた。こうして、現在の暦に近いものが誕生した。

なお、カエサルは自らの功績や名声を後世に残すために、自分の誕生月である7月を自分の名前に因んで、Julius と改名した。

2 | アウグストゥスの改暦

カエサルの妹の孫の初代ローマ皇帝 Augustus (アウグストゥス) は、戦勝記念という大義名分の下に、8月を Augustus に改名する。合わせて、自分の月が他の月よりも日数が少ないのは皇帝の権威にかかわるということで、8月を31日にして、その代わりに2月を28日にした。これにより、7月、8月、9月と31日の大の月が3ヶ月続くことになったことから、カエサルと自分の月の7月と8月の日数はそのままにして、8月以降、大の月と小の月が交互になるように、月の日数を増減させてしまった。これにより、元々の奇数月が大の月、偶数月が小の月というシンプルなルールが壊されて、現在のような月ごとの日数構成になってしまった。

ローマ時代の暦の変遷(その2)

	ユリウス暦		アウグストゥスの改暦	
1月	Januarius	31日	Januarius	31日
2月	Februarius	29日	Februarius	28日
3月	Martius	31日	Martius	31日
4月	Aprilis	30日	Aprilis	30日
5月	Maius	31日	Maius	31日
6月	Junius	30日	Junius	30日
7月	Julius	31日	Julius	31日
8月	Sextilis	30日	Augustus	31日
9月	September	31日	September	30日
10月	October	30日	October	31日
11月	November	31日	November	30日
12月	December	30日	December	31日
1年		365日		365日

3 | その後の改暦

永田氏の著書によれば、その後のローマ帝国の皇帝も、自分の名前を残すために、改暦をしようとしたり、実際に改暦したようである。例えば、悪名高い第5代ローマ皇帝 Nero（ネロ）も、4月を Neroneus と改めたが、Nero の死後直ちに元に戻されたということである。

そして、結局現代まで生き残ったのは、カエサル の Julius（7月）とアウグストゥスの Augustus（8月）だけということになっている。

5—グレゴリオ暦

現在、世界中で一般的に使用されている暦は、「グレゴリオ暦」と呼ばれるものである。これは、16世紀にローマ法王グレゴリウス13世によって定められたものである。

1 | グレゴリオ暦への改暦

グレゴリオ暦への改暦が行われるまで、ユリウス暦（含むアウグストゥスの改暦）が幅広く使用されていたが、ユリウス暦では実際の太陽の運行よりも1年間で約11分14秒ずつ、暦日の方が長くなっていた。これによって、昼夜の長さが等しくなる日である春分として定められていた3月21日が、実際の春分とずれてくるようになっていた。これを是正するために、グレゴリウス13世は、それまでのずれの累積である10日間を調整するために、1582年10月4日の翌日を10月15日と定めた。併せて、今後のずれを定期的に調整するために、閏年の決まりを「西暦年が4で割り切れる年を閏年とする。ただし、西暦年が100で割り切れても400で割り切れない年は、平年とする。」と改め、まさに現在使用されているルールを構築した。

2 | 各国におけるグレゴリオ暦への改暦

グレゴリオ暦への改暦が行われる前においては、世界各国では各国独自の暦が採用されていた。

グレゴリオ暦への改暦については、まずはカトリック諸国やカトリック諸都市から順次行われていき、その後プロテスタントの国々やアジア諸国へと広がっていった。

例えば、フランス、イタリア、スペイン等では1582年に改暦が行われたが、ドイツのプロテスタ

ント諸都市が改暦したのは1700年であり、英国やその当時の植民地である米国等は1752年、ギリシアでは1924年である等、欧米諸国でも改暦時期は異なっている。

日本がグレゴリオ暦を採用したのは、以前の[基礎研レター](#)でも述べたように1873年である。韓国が1896年、中国が1912年であり、アジア諸国の採用は欧米諸国より、かなり後になってからである。

6—ローマ時代以前や中国等における暦について

さて、ここまで、ローマ時代の暦の変遷を通じて、なぜ（北半球では）冬の現在の1月という時期から1年がスタートするのかについて述べてきた。また、その後の現在のグレゴリオ暦に至る推移を概略述べてきた。

ところが、これはあくまでも主としてローマ帝国が支配していた地域に関するものではないかと思われた人も多いと思われる。実際に、世界の各国では、それぞれの地域の文化や風習等から、独自の暦が発展してきている。さらには、ローマ時代以前にも暦の概念はあったのではないかとの疑問もあると思われる。

ここでは、ローマ時代以前の暦や中国と日本におけるグレゴリオ暦以前の「旧暦」について、簡単に述べる。

1 | ローマ時代以前の暦

世界最初の暦については、紀元前3500年前後に栄えたメソポタミア文明においては、現在のイラクあたりに住んでいたシュメール人たちによって作成されたと言われているようである。この暦においては、太陽が最も低く日中の時間が最も短い日である「冬至」の時期が一年の始まりとされ、冬至前後の12日間に新年の祭が開催された。自然と対峙していた人々にとって、冬至を無事乗り切ったことを祝福するためでもあった。また、冬至から太陽は徐々に高くなって、日が長くなっていくことから、この日を1年の区切りや初めと考えるようになっていたものと思われる。

冬至前後に新年を祝う祭を行うことは、その後バビロニアやペルシアの文明にも引き継がれた。

なお、紀元前の古代ローマにおいても、農耕の神を祀り、闇を追い払うための冬至祭りが開催されていた。

このように、暦においては、「冬至」¹は大きな意味合いを有する日であった。

2 | 古代エジプトにおける暦

古代エジプトにおいては、「エジプト暦」と呼ばれるものが使用されていた。これは、初めは1年を12ヶ月、1ヶ月を30日、1年を360日とするものであったが、紀元前20世紀頃から1年が365日となり、30日ずつの月12か月に5日の余日を最後に付加する太陽暦法であった。

エジプトでは、「シリウス（おおいぬ座 α （アルファ）星）が日の出の直前に東天に昇るころの一定時期に、ナイル川が氾濫（はんらん）し、農業や生活に重大な影響を与えた。そのためシリウスの日の出直前の出現を予知する必要から1年365.25日を知り、シリウスの出現の日は元日とされた。」（小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)）とのことである。

¹ 北欧等の夜の長い冬を迎える国々では、現在でも冬至は特に大切な日と考えられており、盛大なお祭りが開催されている。

3 | 中国における暦

先に述べたように、中国においては辛亥革命以後の 1912 年からグレゴリオ暦が採用されたが、それ以前には中国独自の暦が採用されていた。

中国の暦は太陰太陽暦であり、季節は 1 太陽年を 24 等分した「二十四節気」²を基準に定められた。閏月は年の途中の二十四節気の中気を含まない月とされた。

中国における年始の考え方においても、「冬至」が大きな基準となっていた。冬至は、太陽が最も低く日中の時間が最も短い日であることから、冬至の頃を年初とする考え方が広く存在していた³。一方で、日照時間や大気の温度との関係では、冬至の後に 1 年で最も寒い日がやってくる。中国ではこうした日に相当する日を年初に設定するとの考え方等から、春秋戦国時代には、冬至や冬至の 1 ヶ月後、冬至の 2 ヶ月後に年初を設定する考え方が採用されていた。ただし、漢の時代に、冬至の 2 ヶ月後に設定する方式が採用され、現在の旧正月に踏襲されている。

「立春」というのは、まさにこの日から春が始まるということで、この日から 1 年が始まると考えられた。立春は丁度冬至と春分の間にあたる時期となっている。

4 | 日本における暦

日本でも、こうした中国漢時代に由来する「立春年初」の考え方が採用されていた。なお、年賀状で、立春等と書かれるのは、明治時代に改暦が行われるまで、立春はお正月とほぼ同じ時期だったためである。

7—世界における現在の暦

前章で述べたように、現在、世界中で使用されている暦のグローバルスタンダードになっているのは、グレゴリオ暦であるが、世界で使用されている暦はグレゴリオ暦だけではない。

1 | 東アジアの国々における旧暦

「旧暦」というのは、改暦があった場合のそれ以前に使われていた暦法のことを指しているが、多くの国ではグレゴリオ暦が現行暦のため、グレゴリオ暦の前の暦法を指している。東アジアの多くの国々では、グレゴリオ暦の採用が欧米諸国に比べて比較的最近であることから、旧暦に基づいた文化や風習も引き続き国民の生活に根付いた形になっている。

例えば、皆さんもご存知のように、新年のお祝いの行事は、中国や台湾では現在でも「春節」と呼ばれ、旧暦による正月（旧正月）に行われている。韓国やベトナム、モンゴル等でも旧暦による正月がグレゴリオ暦の正月より盛大に祝われている。

なお、日本においても旧暦の文化等が残っており、例えば、お盆については、多くの地域では新暦の 8 月 15 日となっているが、新暦の 7 月 15 日や沖縄のように従前どおりに旧暦の 7 月 15 日となっている地域もある。さらに、現在でも旧暦で付けられていた各月の名前が使用されている（ただし、

² 1 年を 12 の「節気」と 12 の「中気」に分類し、それらに季節を表す名前が付けられている。重要な中気としては、夏至・冬至・春分・秋分、重要な節気としては、立春・立夏・立秋・立冬が挙げられる。その他に、大寒、啓蟄等が含まれる。

³ 陰陽説からも、冬至の瞬間は、陰に属して運氣が弱いと考えられており、冬至を過ぎることで、陰が極まり再び陽にかえる（一陽来復）と解され、冬至は「全てが上昇運に転じる日」と解されているようである。

旧暦は現在の暦よりも約1ヶ月遅れているので、それらの名前の意味するところを現在の暦で考えると、実際の季節とマッチしていないことになる。

2 | イスラムの国々における暦

(1) イスラム暦

「イスラム暦（ビジュラ暦）」は、「マホメットが50歳の時に神の啓示を受けたメッカからヤスリブ（後のメジナ）に移った年を記念して、二代目カリフのウマルが西暦622年を「ヘジラ紀元」の元年として定めたものといわれている。」とのことである。

イスラム暦は1年が354日で、奇数月は30日、偶数月は29日となり、独自の方式で設定される閏年もある。断食月であるラマダーンはこのイスラム暦に基づいて決定されるため、グレゴリオ暦に比べて毎年11日ずつ早くなる、そのため、ラマダーンの時期は毎年異なって、3年に1ヶ月ずつずれていくことになる。

なお、イスラム圏の大国であるサウジアラビアは、イスラム暦をつい最近まで公式の暦として使用していたが、2016年に、ムハンマド・ビン・サルマーン副王太子（当時）が、グレゴリオ暦への変更を行っている。

(2) イラン暦

イランにおいては、「イラン暦」とよばれるものが、イランを中心に、中東の広い地域で使われている。イランは長く太陰暦である「イスラム暦」を使用していたが、1925年に新たに太陽暦である「イラン暦」をつくり、現在公用暦として使用されている。このイラン暦では、春分に相当する日が元日にあたり、「ノウルーズ」として祝われる。

このノウルーズについては、ソビエト連邦から独立した中央アジア5か国（カザフスタン、トルクメニスタン、キルギス、タジキスタン、ウズベキスタン）やアゼルバイジャンではいずれも国家の祝日として、広く祝われており、その他にアフガニスタンやパキスタンやトルコ等でも祝祭が行われる。

8—再び、なぜ冬の1月という時期から新年がスタートするのかについて

「2—ローマ時代の暦の変遷（その1）と1年が現在の1月からスタートすることになった理由」においては、ローマ時代の改暦の経緯から、なぜ冬の1月という時期から新年がスタートするのかについて説明したが、あらためて、「6—ローマ時代以前や中国等における暦について」でも述べたように、世界の各国における暦は、基本的には、冬至等の最も寒さが厳しい、日中の時間が短い日をボトムとして、「これから日中の時間が長くなっていく日」を、新年を迎えるスタートの日として設定するという考え方からスタートしているようである。それが、グレゴリオ暦が世界のグローバルスタンダードになっていく中で、現在の1月を新年とする暦に変更されてきている。

その意味では、春に新年がスタートするとの考え方は、極めて自然なものであり、人々の生活や慣習にマッチしているといえるものと思われる。ところが、それを超えての、諸般の事情を考慮しての政治的な決断等が現在の暦を作り上げてきたといえる。

世の中のルールと言うものは、往々にして、このような形で設定され、定着してきているものである。似たようなことは、[以前の研究員の眼「左側通行？右側通行？」](#)で、現在の通行ルールが設定さ

れてきた経緯を調べてみた場合にも見られていた。

いずれにしても、暦に関しては、ほぼ世界的に1つの同じ暦に統一されてきていることは、暦の持つ重要性を考慮した場合、望ましいことであったと言えるだろう。一方で、従前の伝統に基づいた旧暦の考え方に因んだ各種の文化・風習等が、それぞれの国や地域で継承されていくことは、また大事なことであると思われる。今後とも、こうした点が将来にわたって長く継続されていくことを望みたいものである。

(参考) 太陽暦と太陰暦と太陰太陽暦

「太陽暦 (Solar Calendar)」とは、地球が太陽の周りを回る周期 (太陽年) を基にして作られた暦であり、ユリウス暦や、グレゴリオ暦は、太陽暦の1種である。太陽暦の1年は約365日で「閏年」が存在している。

「太陰暦 (Lunar Calendar)」とは、月の満ち欠けの周期を基にした暦であり、イスラム暦が太陰暦である。1年は354日で、29日の月と30日の月が繰り返される。閏月の概念はないので、季節がずれていくことになる。

「太陰太陽暦 (Luni-solar Calendar)」とは、太陰暦を基とするが、太陽の動きも参考にして閏月を入れ、月日を定める暦であり、日本の明治5年以前の天保暦と呼ばれる旧暦や中国における伝統的な暦がこれに相当している。太陰太陽暦の1年は約354日で、例えば「17年7閏法」というような形で、約3年に1回の「閏月」を入れることで季節の調整が行われる。

以 上